

# 文科系短期大学における情報処理教育

1Q-5

渡辺 律子 凍田 和美 関 美由紀

大分県立芸術文化短期大学

## 1. はじめに

本学は平成4年、文科系2学科の増設に伴い、情報処理教育用パソコンネットワークシステムを導入した。本稿では、計算機システムの概要と文科系学生のための情報処理教育の経験を述べる。

## 2. 一般情報処理教育の必要性と教育理念<sup>[1]</sup>

高度に情報化した現代社会においては、情報処理の専門家や技術者のみでなく全ての人々にとって、情報処理に関する正しい素養が不可欠である。また情報処理の基本概念・技術の修得は、柔軟性のある若いうちが望ましい。具体的な教育目標として、①情報価値の理解力、情報処理能力の体得、②情報に関する基本概念の修得、③情報システムに対する恐怖・過信の除去などがあげられる。

## 3. 本学の情報処理教育方針

本学では、①具体例による情報処理の基礎概念の理解、②ソフトウェアパッケージ使用による情報処理技術・知識の修得、③仕事の記述法としての視覚的なプログラムの作成、④計算機を介した情報通信システムの体験、⑤授業時間外の利用の促進、⑥ワープロ検定、情報処理技術者試験等の研修会の開催などの方針により情報処理教育を行っている。

## 4. 本学情報処理教育システムの概要<sup>[2]</sup>

情報処理教育システムは、コミュニケーション、マルチメディア、ユーザ指向の特徴をもつ。111台のFM-TOWNSが4台のワークステーション、ファイルサーバ、プリントサーバにつながっている(図1参照)。人文棟内はLANが構築され、各講義室、演習室、教室から本システムの利用が可能である。コミュニケーションサーバ(WS)は、大分大学知能情

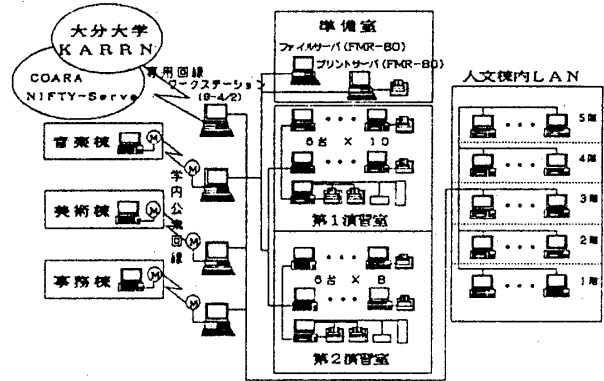


図1 システム構成

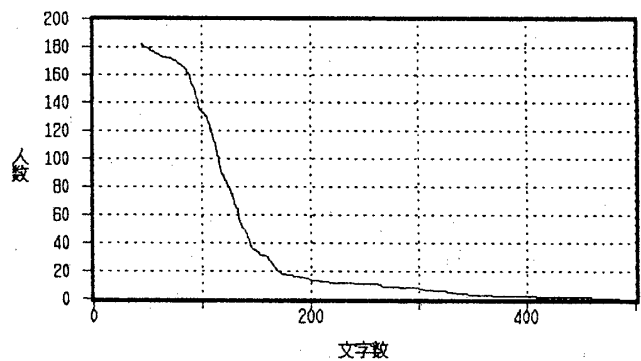


図2 10分間文字入力数(入学1カ月後)

報システム工学科と専用回線で接続されている。

## 5. 本学での情報処理教育経験

(1) 入門教育 毎年、入学時に学生のワープロ、パソコン等の経験度を調べている。触ったことがない、ほとんど使えないと答えた学生が大半を占める。また入学1カ月後に行った文字入力テストの結果を図2に示す。こうした背景から、入門教育では学生6名に1人のチュータをつけた指導を行っている。

(2) 課題研究 情報処理演習、終盤の3カ月間は課題研究にあてている。課題研究は学生6名が1グループとなり、自由なテーマを設定して作品を完成する。それまでに習ったソフトを道具として使い、課題を解く過程で情報処理の楽しさ、難しさ、大切さを学ぶ。

(3) パソコン通信を利用した情報処理教育 ヒュー

An Example of education of information processing in college

Ritsuko Watanabe, Kazuyoshi Korida, Miyuki Seki  
Oita Prefectural College of Arts & Culture  
Uenogaoka Higashi 1-11, Oita

マンマシンコミュニケーション論では、講義にパソコン通信を取り入れている。実社会での情報処理体験から、計算機を介したコミュニケーションの意義や人と機械とのコミュニケーションのあり方を考える。パソコン通信COARAには、60以上の会議室があり、その中で意見交換が行われている。CAMPUSという本学専用の会議室を設け、学生が主体となって、その運営を行っている。

(4) 各種研修会と広報活動 卒業後も十分に情報処理技術を使いこなすには、2年間を通して用意された情報処理関連の科目数では不十分である。春・夏期を中心に、年間10以上の研修会を行っている。また情報処理演習室ニュースを学生・教職員を対象に年間7、8回発行し、情報処理教育の普及に力をいれている。

6. 情報処理演習システムの利用状況

演習システム利用状況の把握を目的として、ネットワークを介した履歴情報の収集と利用状況の解析を行っている。新入生が入学する4月～6月は、利用件数が急増する(図3参照)。また春・夏休みや試験中にあたる、2～3月、7～8月は利用が少ない。曜日・時間帯別に見ると、午後から講義がない水曜日以外は、よく使用されている(図4参照)。演習室利用時間外の17時以降の利用も相当数ある。

7. 考察

(1) 本システム設置後3年目を迎え、ハード的な環境はほぼ整った。チュータ制の効果により、初めて計算機に触る新入生も積極的に演習に取り組むようになった。2年生も教えることを通じて学ぶものは多い。

(2) 1年間の情報処理演習を通して最も学生の印象に残り、情報処理能力が身につくのは、課題研究である。課題研究は、課題を解決する良い道具と、それを使いこなす良い指導力により効果を発揮する。200名の学生に対し2人の教師と2人の実習助手という体制では、十分な指導は困難である。

(3) 情報処理関連科目のテキスト・資料を一冊にまとめた「情報処理演習ノート」を作成し、講義・演習の両面から情報処理の知識と技術の補充を行っている。2年次の利用が極端に少ない学科がある。情報処理関連以外の講義での利用に力をいれる必要がある。

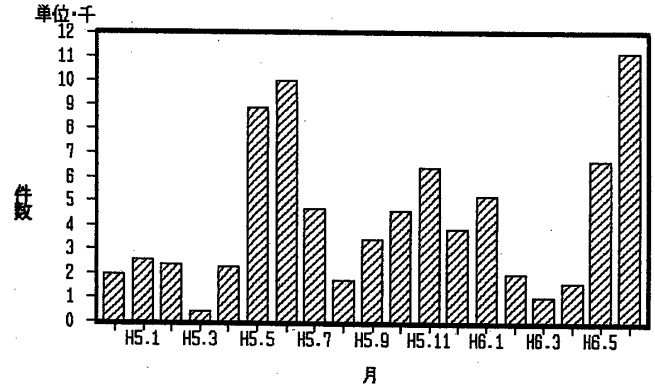


図3 月別利用件数 (H4.12～H6.6)

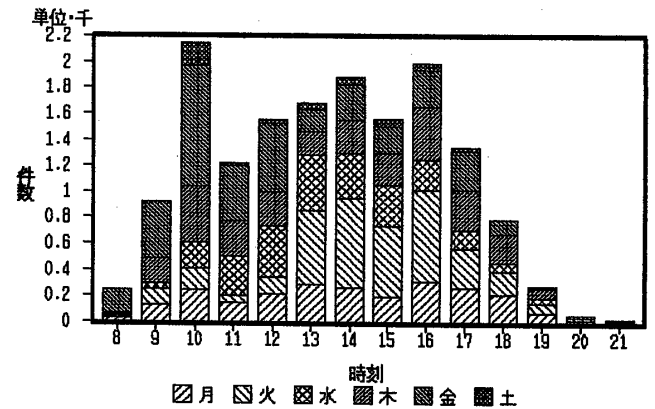


図4 曜日・時間帯別利用件数 (平成6年6月)

(4) 講義時間外の活動である研修会の成果は大きく、ワープロ検定では好成績を納めている。しかし、研修会、練習は、利用時間外の17時以降や土・日曜に行わざるを得ない。運用体制を再検討する必要がある。

8. おわりに

地域に開かれた大学の活動として、一般住民を対象に「公開講座 パソコン入門」を始めた。コンピュータが普及してきた小中学校から生涯学習までの教育体系の中で、本学がなすべき情報処理教育を探求するために、大分県内の教育・研究機関における情報処理教育及び計算機環境の実態調査を、現在、行っている。こうした調査研究活動が、大分県の情報処理教育の推進に少しでも役立てばと考える。

参考文献

[1] 大学等における一般情報処理教育の在り方に関する調査研究委員会：大学等における一般情報処理教育の在り方に関する調査研究、情報処理学会(1993)。  
 [2] 渡辺律子他：短期大学における文科系の情報処理教育、情報処理教育研究集会論文集(1993)。